

現代型住居の解釈（梗概）

主査 小柳津醇一

——（続）体験記述にもとづく日本住居現代史と住居論——

1. 研究の目的と方法

本研究は1987年度研究「型の崩壊と生成—体験記述にもとづく日本住居現代史と住居論—」の継続研究である。前回の研究では、体験記述という方法によって昭和初期から現在に至るまでの住居の流れを居住者の目を通して記録・記述し、かつての日本住宅の型のもっていた生活上の意味や居住者の受け止め方、またさまざまな社会状況の中で新しいものを受け入れていくさまや新旧要素をめぐっての居住者の葛藤^{かつとう}などについて記述した。そして、どのようにして先行する時代の型が崩壊してきたかを考察した。また「現代型住居」とでもいべき新しい型が生成されつつあることも確認した。この研究によって、変遷過程としての住居現代史を考察するという点に関しては一定の成果を上げたと思われる。

しかしながら、変遷過程としては共通の理解がえられながらも、現代型住居の見方や評価（解釈）については研究者間の理解が一致したわけではなく、課題を残すこととなった。本研究は、この現代型住居に焦点をあててその意味の解釈を行ない、日本住居現代史と住居論の深化を目指すものである。

住居・住様式の歴史は大きな流れになぞらえられる。絶えず変化流動する中で既成の型が次第に変容・崩壊すると同時に新しい型が生成される。歴史的に形成された型は強い持続力を持ち、生活習慣や社会規範、住居観、または生まれ育った住居での刷り込まれた感覚等がこの原動力となる。しかし、それも徐々に崩されていく。変容を促す力には、一方には時代の状況があるし、他方には人為的・意識的に企てられた計画の力が存在する。公共住宅での試み、建築家の住宅提案、住宅メーカーの実験的な試み、メディアを通しての宣伝・イメージ形成、時代の思潮・気分のようなもの等が変容の力となる。このような型の持続の力と変容を促す外界の力との対立・葛藤を通して住居が変容しているのである。

本研究では、このような住居変容についての基本的な見方から出発して現代型住居の解釈を行なおうとする。すなわち、まず、現代型住居の変遷過程をおさえて現代型住居の典型を描き出す。ここでの典型は住居史という流れの中であって時代の最先端にあるもの、それも特殊

例ではなく広く分布し（最大多数である必要はない）、流れの方向づけに対して強い影響力をもっているものとして捉えている。この流れは一筋ではなくいくつかありそうに思えるために、本年度は大都市のみならず地方都市および農村部にも対象を広げ、歴史的・系譜的な検討を行なった。

次に現代型住居の間取りや室形態、外部空間との関係などにみられる特徴的な諸側面を抽出し、それが形成される際のさまざまな力の対立・葛藤を考察し、なぜそうした特徴が形成されているのか、また問題点はどこにあるのか等を解釈・考察する。これをまとめて住居論として構築するという手順で行なうのである。

以上の研究課題に接近するためのデータは前回の研究同様体験記述のデータを基本としている。居住者自身の居住体験を本人が記述するというのが体験記述である。体験・記憶によって描かれるものであるから居住者の個人的な主観や部分的な記憶が含まれることになるが、そこにこそ特色がある。生々しい記述から人々が感じていたことや住み方、問題の処理方法の共通性などを読み取り、住居と生活の深い関係を知ることができるのである。表面的なデータだけではなく、このような内面的な資料も事実の解釈には不可欠であると考えている。また、記述者の階層が限定されることによる問題もあるが、分析はこの資料だけで行なうわけではなく、数量的に処理するわけでもない。事例の位置付けを明確にし、その中で上記のような検討を行なうのである。

無論、事例を蓄積し、精度を高めることも必要である。このため、本年度は前回の資料に加えて、各大学の大学院生、学生の体験記述を追加している。（この資料は本梗概では割愛する。）また、研究課題に即して体験記述の書き加え・追加調査等を行なっている。さらに、研究者それぞれが独自に行なっている調査結果を援用し、またハウジング・スタディ・グループとしての踏査でえられた資料も用いている。

分析はこれらの資料と各自のこれまでの研究成果をもとにする討論・解釈を基本としている。その積み重ねによってより深い現代型住居の解釈ができるようにと配慮してまとめたものである。

2. 現代住居の3つの型

2-1. 戦後住宅の動向と3つの型

昨今の住宅の多様な展開、その流れは概ね戦後の動きとして捉えることができる。それは、まず戦前と戦後の社会的不連続性を指摘しなければならず、次いで戦後に始まる住宅の建設や取得にかかわる様々な制度の確立、公的供給主体の設立、工業化構法と産業化などの住宅建設を取り巻く枠組みの変化、多様化、さらには戦後政治のなかで一貫して欠如し続けた土地対策などと不可分の関係をもちながら展開したからである。

そして、昨今の諸状況への道程を巨視的にみると、オイルショック後の低成長期を迎え住宅の質の問題が議論され始めた頃から、住宅の形式は多様に展開する。「人と同じ家に住みたい」という中流階層の要求は「人と違った家に住みたい」という要求へと確実に変化した。必然的にかつての居住のテキストは崩れ、住宅の型をめぐる理論にも異質なパラダイムが求められることになる。ここでは、戦後の体験記述を踏まえるなかから抽出された3つの型の背景と動向について概観したい。

1) 都市LDK型について

高度経済成長期の都市家族は、国家や社会の繁栄よりも個人の自由を尊重し、その要求を獲得目標として生活を物質消費のなかに象徴的に展開したと言ってよい。このマイホーム主義の中身は、企業に献身するモーレツ社員の主人と教育ママの主婦、それにテストに追われる子供たちで構成され、その『狭いながらも楽しいわが家』では、主人のいない団らんや部屋に籠もる子供の生活を当たり前のように受け止める生活スタイルが展開した。

オイルショック以降、住宅は量から質の時代へと変化する。これは、戦後一貫して展開された量を確保するための住宅建設が終焉したことを確認し、代わりに新しい状況の到来を質の確保として、住宅を供給する立場から期待値を込めて捉え直したに過ぎない。結果は、官、民を問わず、供給側が住宅の質を追求するのではなく、限らないメニューを用意して住み手の要求に対応する状況を生み出した。産業はターゲットを絞り込んで住宅のイメージをつくりあげ、あるいは住み手に対する多くの誘導を行なった。とは言え、もう一方では常に市場原理が貫かれていた。一見、多様性、選択性を標榜する住宅評価に対する隠れ蓑とすることによって、表面的には住宅の決定の多くを買い手(住み手)に委ねたのである。

このような状況のなかで、大都市の独立住宅は、生活対応の質的水準を無視してnLDK型とひとまとめに呼称される曖昧なものへと動いていく。やがて低成長期を迎え、都市住居は確実に生活の型を伴って都市LDK型へと収斂させてゆくのである。

2) 集合住宅型について

1960年代に入ると民間による集合住宅建設が盛んになる。このマンション建設は市場の経済に左右されブームの波をつくりながら展開した。そして、ブームの到来とともに購入する対象や規模や地域を変えて展開した。民間のものは、公営のものに較べ住戸の間口が著しくセーブされていた。1970年代前半までの住戸平面には、和室が2室続き、しかも奥まった和室があんどん部屋になる事例や、採光の得られない真ん中の部屋がLDKになる事例が存在するなど、形式が模索されていた。70年代の後半になって、ようやく民間マンションにも型らしきものが生まれ、80年代に入って定着するようになる。

1980年代に入ってから公営住宅や公団住宅の住戸は、以前のものに較べ規模が著しく拡大し、それに伴って平面もまた多様な展開をみせている。しかし、その多様ななかにも、民間マンションが収束していった平面的特徴や形式が無意識のうちに踏襲されている。多様にみえる平面も、実はその原則の上に動いているのである。

3) 地方続き間型について

伝統的な民家が急速に失われ始めるのは、1960年代に入ってからである。地方都市の環境が大きく変わり始め、周辺へとスプロールを始めた時期である。

都市化や産業化が地方都市にも及び経済活動が活発化すると、戦前からの都心の併用住宅の一部は商業施設や業務施設へと改変され、一方で旧市街の周辺に工業団地や商業団地が形成されて、その住宅地に市内と周辺の農村部の若い世代を集めて新しい住宅がつくられてゆく。

この新しい地方都市の住宅は、戦前から戦後にかけて、それまでの都心に多く見られた町家や長屋と異なっていた。むしろ南を強く意識した農家の特徴を強く反映するのである。当時の都市近郊の農村住宅の先進事例には、すでに土間が縮小され、そこに玄関と廊下が導入され、DKスタイルが持ちこまれつつあったが、郊外の新しい住宅はそれらの特徴と余り違わないものであった。すなわち、玄関の構えや縁側の付随した続き間座敷にこだわりのながら、一方でダイニングキッチンを積極的に受け入れ、さらに、廊下空間を動線として展開させて生活の合理化を図るものであった。

1970年代の中頃からは、研究者によって、地方都市の住宅に続き間座敷をもつ事例の多いことが度々報告されてきた。これらは概ね地方続き間型の特徴を示しているが、年代が下るにつれて、座敷や洋風の居間を整備するなど特徴を強化する方向に動いた。その一方で、大都市や地方都市の郊外に、いわゆる入母屋御殿が目立って建設されるようになった。しかし、入母屋御殿の形態面が平面形式を規定することはなかった。むしろ、入母屋御殿の外観の表現は、座敷空間を重視して格式を強調する地方続き間型の形式と整合したのである。

2-2. 都市 LDK 型

「都市 LDK 型」は大都市（とくに首都圏など）の新建築建売り住宅など多くの戸建住宅に典型的に見られるものであり既に1987年度研究「型の崩壊と生成—体験記述にもとづく日本住居現代史と住居論」に取り上げて論じたが、その平面構成上の特徴をあらためて列挙すれば、次の如くである（図1、2）。

- ① 概ね2階建て。1階が食事・だんらん・接客などの家族共通の生活部分に当てられ、2階が個室となる。個室は概ね家族構成員の各人に割り振られる。空間の公私分画が基本理念となっている。
- ② 食事はDK形式が多いが、リビングの一隅に食事の場を持つこともある。食事はイス坐式の例が多い。
- ③ 洋風の居間を平面の主要部分に持つ。LとDとKが空間的に連続しこれがこの型の主要部分を構成することからLDK型と名付けた。
- ④ 和室を少なくとも1室持つ。これは床の間付きの整った座敷を形作り、概ね玄関の近くに位置し、かつ洋風居間と開放的につながる場合が多い。この和室は接客の場となると同時に、夫婦の寝室として使われる例も多い。
- ⑤ 主要室は南面し、水まわり等サービス部分が北側に

位置する。玄関は東西または北側に位置することが多い。

- ⑥ 廊下によって各室が結ばれ、それぞれの部屋は動線的に独立性がある。

この型は大都市の郊外住宅として典型的であり、建売り分譲住宅やプレファブ住宅に特徴的に見られるが、一般注文住宅にも甚だ多い。また、上述の特徴のうち⑤⑥はいわゆる中廊下型と共通する点であり、基本構成においてその流れにあることを指摘できよう。都市 LDK 型の1室和室と居間、中廊下型の応接間と茶の間はそれぞれ和洋が逆転している。

間取りの細部においては、DK形式かあるいはLの中にDが入るか、Lと和室が連絡するか区切られるか、2階個室が和室か洋室か（一般に主寝室と想定される部屋だけ和室という型が多い）、など若干の違いがみられる。さらに近年の建売り住宅では、玄関に2階までの吹抜け空間を設ける、屋根裏収納（または屋根裏部屋）を設ける、などの付加的工夫も見られる。

また、都市 LDK 型に似るが、その和室が続き間になったり、あるいはL（洋室の居間）が茶の間（和室になったりする態のものがある。これらは地方都市においてむしろ数の上で多く、サラリーマン層の住宅によくみられる型である（図3）。

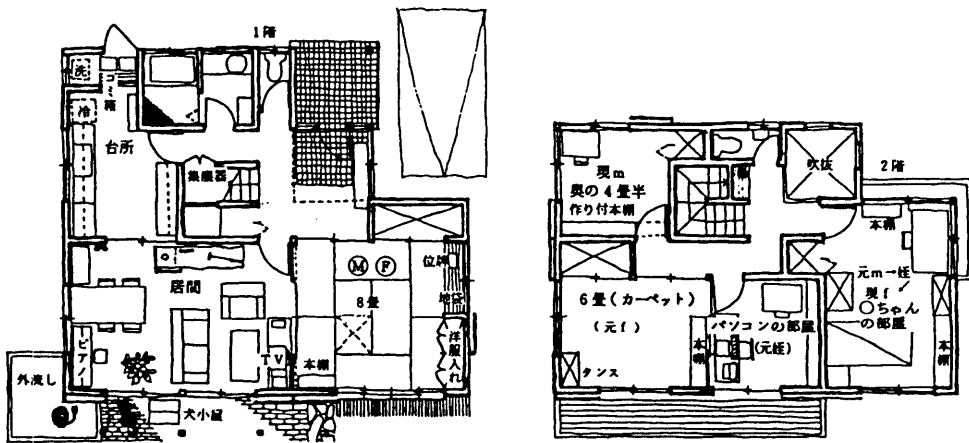


図2 都市 LDK 型典型例

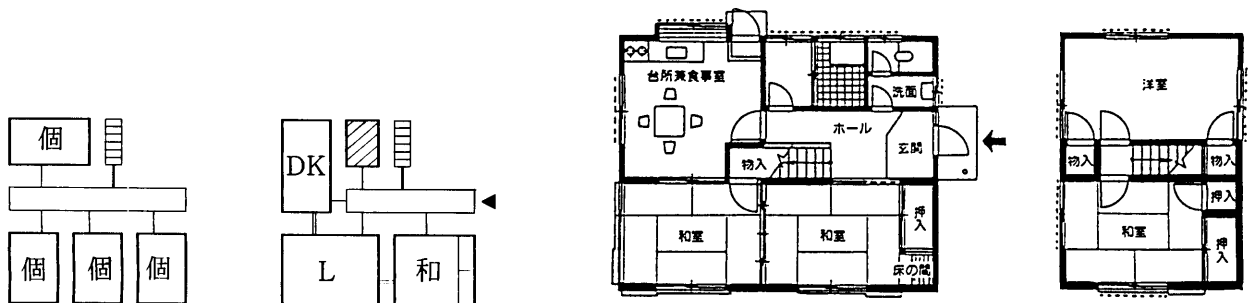


図1 都市 LDK 型模式図

図3 都市 LDK 型（Lが和室になった例）
（公庫標準住宅集より）

2-3. 集合住宅型

この項では、都市部を中心に数多く建設されているRC構造の集合住宅について取り上げる。

戦後すぐに建てられた公共の集合住宅の平面は、基本的には戦前の同潤会と変わらなかった。つまり南北につながる続き間を中心構成された。住戸平面が初めて明確に計画的な意図をもって提案されたのが、公営住宅の鉄筋コンクリートアパート標準設計「51C型」である(図4)。これは西山卯三の食寝分離の考えを、DKという空間を生み出すことによって実現させたものである。と同時に51C型は、DKにつながる部屋と独立した部屋という2種類の居室をつくり出した。そして子供の勉強部屋を優先する風潮の中で、独立した居室の方を子供、DKに続く和室を夫婦が使用する就寝形態が一般化した。

51C型はその後2DKと名を変えて定着した。また経済成長とともに住戸規模も少しずつ増加し、3DK、3LDKが登場した。3DKは、2DKの平面にもう1室個室を付加したもので、住戸規模が拡大した場合に私室数を増やすことで対応する傾向、また私室の個室化傾向を生み出した。3LDKでは更に、食事と密接な関係にあった団らんの行為を独立させ、リビングという空間をつくり出した。ただし、これらは基本的には2DKの延長上にあり、DKがLDKになった後もその狭さをカバーするかのようにつなげて計画された。そして現代の都市住宅では「リビングに続く和室」としてごく一般的なものとなり、住戸面積が2倍以上になった今日でさえ夫婦の就寝室としてリビング隣の和室を使用する事例が数多く見られる(図8、図9)。

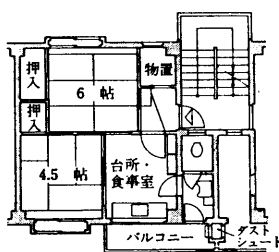


図4 51C型 (1951年)

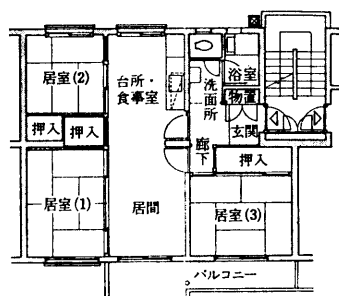


図5 初期の3LDK (1963年)

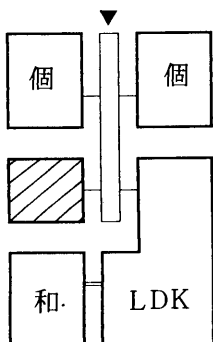


図6 集合住宅型の模式図

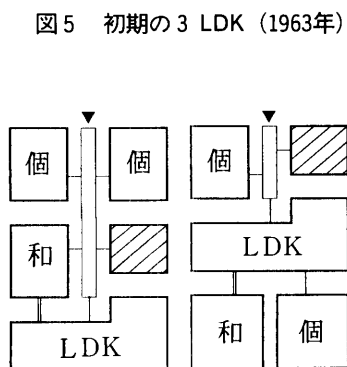


図7 集合住宅型のバリエーション

1967年の第2次マンションブームはRC造の集合住宅を大衆化させた。住戸規模と間口が縮小され高密度が図られた。その結果、南側に3室(L, Lに続く和室, 独立した個室)が面するそれまでの3LDK(図5)に代わって、住戸の間口が著しく狭められた奥行き長い住戸が生まれた(図8)。

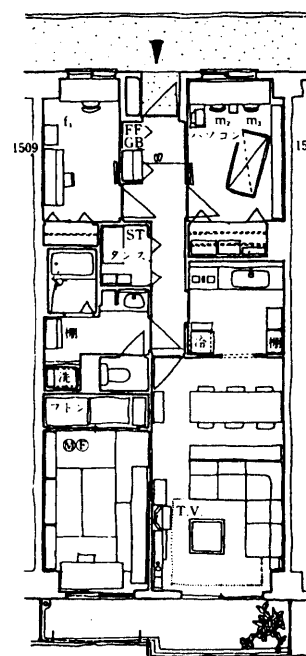
現在の集合住宅の典型的な住戸の型(図6)は、都市部のこのような背景からつくられた平面がもととなっている。その特徴として、

- ① 間口が奥行きより狭い。
 - ② 住戸の真ん中に水まわりを置き、居室を北と南に分ける。
 - ③ 北と南の居室は短い廊下でつながれる。
 - ④ 南側にLD(K), 北側には私室が計画される。
 - ⑤ Lに開放的に連続する和室が設けられる。
- 等があげられる。

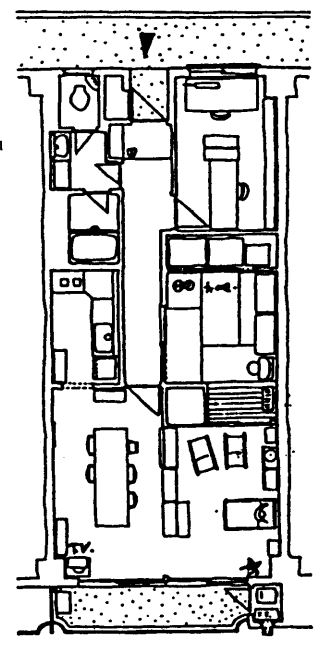
また、その住まい方が、子供がある年齢以上になると大変似通っていることも特徴のひとつである。例えば、図8は現代集合住宅の典型的な平面であるが、

- ① 北側の洋室を子供室としている。
- ② 夫婦がLDの隣の和室に就寝している。
- ③ LDは食事(まずまちがいなくダイニングテーブルが置かれる)、団らん(大抵、ソファとTVが置かれる)、接客に使われる。

という住まい方はこのタイプの平面にしばしば共通して見られる特徴である。なお、図7のような平面も多く供給されているが、その考え方や住まい方(図9)は図6に近く、バリエーションと考えることができる。



建設/1981年
図8 集合住宅型典型例1



建設/1974年
図9 集合住宅型典型例2

2-4. 地方続き間型

「地方続き間型」は、地方ごとの独自性を示すのではなく、全国的に共通の型として普及しつつあるように見受けられる。この型の典型的な間取りの特徴を列記すれば以下の如くである（図10、11）。

- ① 南向きに玄関を持つ。
- ② 玄関から入って片側に続き間座敷の接客部分を持つ。
- ③ 他方に日常生活部分を持ち、多くは手前（南）に居間、奥（北）にDKを持つ。DKの普及は著しい。居間は和室（茶の間）の場合も、洋室の場合もある。
- ④ 上記接客部分と日常生活部分は玄関及びホールまたは廊下により明確に区分される。このホールまたは廊下から2階へ上がる階段がある。
- ⑤ 2階は多くの場合個室として構成されるが、時には2階座敷を持つ。新築では2階を居室として作る例が一般化した。これは都市LDK型住宅からの影響とも考えられる。

さて、この型の成立の経緯を考察してみると、四つ間型農家からの流れとともに、都市中流住宅からの流れとも考えられる。

玄関の南入り、およびそれによりもたらされる強い正面性は、現在の新築される農家住宅と共通する特徴であ

る。土間が次第に縮小退化して茶の間などDKなどの部屋になるが、入口の位置のみは変わらず、玄関となったものと思われる。ここでは本来なかった玄関に意匠を凝らすことが一つの特徴となっている。

座敷、とくに続き間座敷は、人寄せのためには欠かせないものであり、地方住宅でこれが存続することは首肯できる。但し、この座敷は戦前から伝統的住宅の名残とのみは考えられない。戦前以上に立派に作られる反面、伝統の様式が無視あるいは軽視される。即ち、座敷は戦前にも増して、地方住居におけるステータスないしは家の象徴としての意味を帯びている。

このような「地方続き間型」は、地方都市ならびに農村部の新築住宅に多く、とくにその地域に住み続ける人たちの旧来からの家の建て替えに多く見られる。

地方続き間型の中でとくに極端な例として「入母屋御殿」などと俗称される豪華なものがある。区画整理やダム造成などによる立ち退きによって得た多額の補償金などによって新築される和風豪邸で、多くが派手な入母屋屋根を持つためにこう呼ばれる。しかもこれは、その地方の伝統的民家の意匠とは関係なく、都市の数寄屋の流れを汲む入母屋を装う。全国共通のマニュアルが木工・工務店の間に広く行き渡っており、これにもとづく場合も少なくない。平面形式は地方続き間型と同じでありとくにその大規模版、豪華版といえよう（図12）。

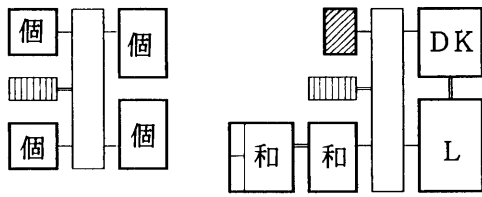


図10 地方続き間型模式図

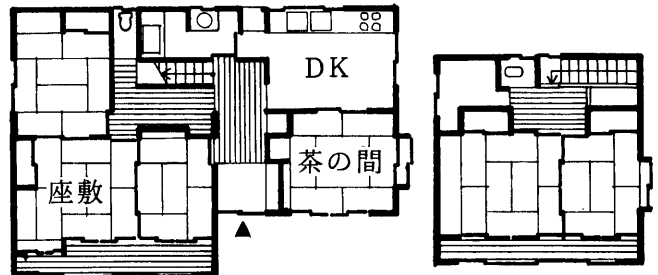


図11 地方続き間型典型例（会津若松市調査事例より）

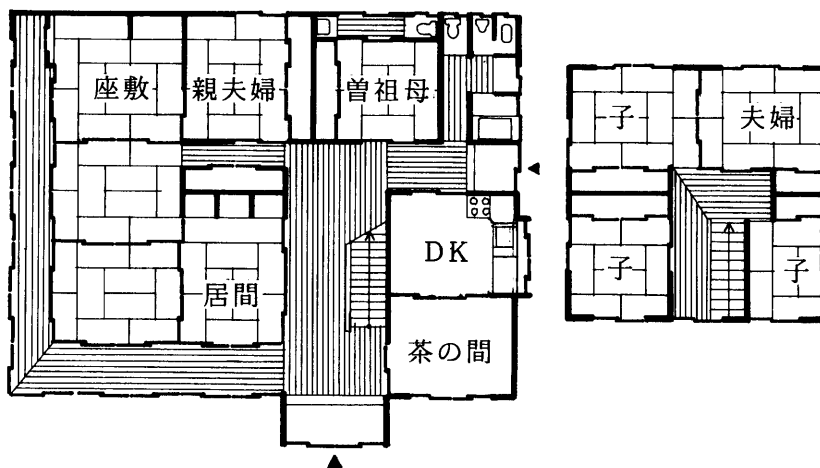


図12 「入母屋御殿」の例（八戸市調査事例より）

3. 現代型住宅の特徴的諸側面に関する考察

3-1. 空間の開放性・連続性とその閉鎖化・個別化

〔日本住宅における開放性・連続性の流れ〕

日本の住居は、戸内における造りが開放的で、その中を軽い間仕切りで空間を分けるという構成手法がとられていた。このような造りは、西欧や中国のように、部屋としての単位空間を作りこれをつなぎ合わせて住居とするという構成とはいちじるしく異なる。この開放的な造りは、高温多湿の気候風土のもたらしたものであり、また豊富な木材による柱・梁の架構のしからしめるものであるといった解釈が多いが、同時に、上層住宅に定型化された接客構えとしての続き間座敷の構成がそのまま広く普及したという社会的事情によるところも大きい。

武家住宅の間取りの中心となる〔座敷一次の間一縁一玄関〕の構成は、そのまま近代の都市中流住宅の間取りの骨格となり、また農家にも影響を与えて、続き間座敷を保有させた。この空間構成の中に存在する〔オモテウチ〕〔テーマーオク〕の構造は、第二次世界大戦前までの日本住居の体質に深く染みついていたといえる。

〔洋風化に伴う間仕切りの導入〕

大戦後、とくに高度成長期を通じての日本住宅の変化の一つは、この開放的・連続的な空間に固い間仕切りが導入され、空間の閉鎖化・個別化が進行したという現象である。しかしなお洋風居間と和室が連続するなど、旧来の空間構成原理を明瞭に存続させている。

間仕切り発生の動きは、社会的影響によるものと、人為的な計画行為にもとづくものに分けて考えることができる。戦後社会を覆った洋風化傾向はこの前者である。とくに戦後のアメリカからの影響は、衣食住のみならず文化全般に亘った。住における洋風化はまずユカ坐からイス坐への移行であったが、同時に、間取りの上でも西欧風の空間の機能分化を指向するものであった。すなわち、空間を家族の集まり部屋としての居間と各自の私室に分けるものであり、それは必然的に空間の分割・個別化を指向した。とくに、1950—60年代の、建築家の設計による小住宅、いわゆるモダンリビングは、住居空間を公私に分化するという理念への指向が明瞭である。

〔公共住宅における間仕切りの導入〕

間仕切り導入についてのより計画的な動きは公共住宅においてであり、その端緒は1951年度の公営住宅標準設計「51C型」であった。この型では、寝室の独立性確保の意図のもとに、二つの畳の部屋の間壁を設け、強引ともいえる隔離を試みた。これは住み方調査にもとづく住生活研究を基礎としていたが、単に人々の要求がこれを求めたというのではなく、多分に生活の近代化を求める

計画理念から発していたと見なすことができる。

畳の2室の間に壁を設けることは、当時の常識からはいかにも不自然であり、居住者から、また多くの自治体の実施担当者からの反発が少なくなかった。しかしそれにもかかわらず数年を出ない間に広く普及し、居住者からも子供室の確保という意味で歓迎されるようになる。居室間の隔離は、公共住宅の設計の場では次第に一般的手法として定着するに至った。

ただ一方で、初期公営住宅など2室続き間のプランに長年住まっている人たちへのインタビューでは、その広々とした間取りに満足している例が多い。

人間は順応性が強い。単純に近代化を進めることは危険であると共に、プランの評価を単に居住者の反応・要求にのみ頼ることもまた危険である。

〔続き間座敷の存続と和洋室の連続〕

空間の個別化動向に対し、一方では新築住宅にも伝統的な続き間座敷が明瞭な形で維持され、しかも近年ますます立派に造られている。とくに地方の住宅でその傾向が強い。これは、住居における冠婚葬祭など人寄せの慣習が根強く、またこの座敷の所有が住まいの格を示すという観念によると同時に、続き間座敷の空間構成が日本人の心理に深く染みついていることの表れと考えられる。ただし、その座敷の造作は伝統的な作法からは崩れを見せ、生産の合理性や簡便性に支配されている例が多い。

都市住宅では、近年は洋風居間に続いて和室を持つ例が一般化した。この和室と洋室はしばしば襖で仕切られ開放的に連続する。内部意匠のちがいが、坐の様式のちがいなども無視されて唐突に連続する例が多い。これは居間の広がり確保のための手段には違いないが、居間が十分な広さをもつ場合にも同じく連続する。集合住宅では間口の制約から居間がホールとなって和室にアクセスするという動線上の理由もあるが、戸建住宅では一般に廊下から各室へのアクセスが可能である。それにもかかわらず両室をつなげるのは、多人数接客の可能性や部屋の転用性・融通性への期待感などが根底にあるとはいえ、その裏には続き間特有の開放的な連続感への願望、すなわち、単に広さを求めることだけでなく、部屋をつなげて見通すことから得られる空間の重層性に対する思い入れが、日本人の習性として存在するものと考えられる。

そしてこの二つの性格の異なる空間は、来客などの際には襖を閉じてそれぞれ独立に使えることが利点とされるが、現実には襖によって独立性を得るとは言い難い。むしろ、日本の伝統的住居観、すなわちプライバシーよりも互いに気配を感じることが好む日本的な感性、あるいは襖によって仕切られたと認めるとする約束ごとが、今日にも生きていることを示すものであろう。

3-2. 洋室と和室

〔洋風化・イス坐化の動き〕

畳敷き主体の日本住宅に洋風イス坐の生活が持ち込まれたのは近代以降である。明治期には大邸宅において和風家屋に付属する洋館、大正から昭和初期には中流住宅における玄関脇の応接間などがあった。

しかし第二次大戦後における住様式上の変化の特徴は、イス坐が家庭生活の中心ともいべき食事の場や居間に導入され普及したという点である。洋風居間をもついわゆるモダンリビング的な住宅は、1950年代から都市小住宅の設計において一般的になった。生活全般に亘るアメリカの影響は大きかったが、建築設計の理念の上でも住生活の公私分化の観念がこの頃から次第に一般化した。伝統的和風住宅における空間用途の未分化は、古いもの、捨て去るべきものとの観念も共有されていた。

このような社会一般の動向に対し、公共住宅におけるイス坐の導入はより計画的な行為であった。1951年度公営住宅標準設計「51C型」で食事室兼用台所が計画されたことに端を発するが、しかし当初は必ずしもイス坐を前提としたわけではない。当時の極小住宅などでは、台所の中で食事が行なわれても板の間にユカ坐という形式は多かったし、農家のガイドコロでも同様であった。むしろイス坐の食事形式を積極的に推進したのはその後の日本住宅公団であり、ステンレス流しの開発ともあいまって、ダイニングキッチン（DK）を新しい生活スタイルの場として押し出したのである。

DKはその後、一般個人住宅にも建売り住宅にも零細アパートにも、さらには地方の農村住宅にも広く普及した。DKの普及は、家庭生活の中心ともいえる部分の変革という意味でまことに重要である。これは高度成長に伴う人口の都市集中により、故郷を離れ慣習と切り離された層の存在によって促進されたと見ることもできる。

DKに続いては洋風居間が普及した。家庭経済の伸びと共に、ソファ・飾り棚・ピアノ・電蓄（後にはステレオ）などの家具類が豊富になり、これらが和室に持ち込まれ、自然に洋風居間を形成した。そして建築的に造られた洋風居間の普及へと進んだのである。

〔ユカ坐生活の根強い存続〕

一方、ユカ坐生活も根強く存在している。公営住宅では板の間のDKにちゃぶ台で食事する例の多いことが報告されているし、民間零細アパートでも同様である。居住者階層の生活様式による面が大きいと思われる。

地方都市や農村部でもDKが広く普及したが、そのDKが必ずしもすべて食事に使われているわけではない。地方による差、あるいは地域による差は大きい、和室の茶の間が設けられそが生活の中心となっている例は甚だ多い。

〔洋風居間におけるソファの定型化とユカ坐の混在〕

都市住宅にはほぼ全面的に普及したと思われる洋風居間についても同様の状況が見られる。そこには概ね洋風家具がしつらえられるが、型にはまってソファセットが購入され応接室然と置かれるのが一般である。新築・入居にあたり初めて家具を購入する場合が大半で、欧米のように家庭ごとの自由な個性的なしつらえは稀である。洋風居間というものの伝統も経験もないわが国では無理からぬことであろう。

ただ、その居間での生活の様相を見ると、必ずしもイス坐のみではない。カーペットを敷き、ソファから下りて床に直接坐る生活様式の混用される例はきわめて多く、冬季にはこたつを持ち込むこともごく普通に行なわれている。洋風居間での生活スタイルは日本ではまだ安定せず、きわめて流動的である。さらに最近では、床面に近い坐様式の、低いソファやクッションなどを用いるモダンな住み方も次第に広まる傾向を見せ、リビング雑誌などによってさかんに紹介宣伝されている。ここでは今やイス坐とユカ坐の融合が見られ始めている。

〔LKD型住宅における和室・座敷の存続〕

洋風居間が一般化しながら、それに連続して和室を設けることもまた広く行なわれている。家の中に和風の空間も一つは残そうとの要求からであろう。近年は和風というものが改まった気分の場として意識され、これが客間となる。ちょうど戦前の中流住宅に洋風応接間が1室設けられたのと似ているが、その和洋が逆転しているのである。しかもこの和室が接客専用とはならず、居間の延長として、さらには夫婦の寝室として日常的にも使われることが特徴的である。

このような和室の存在は、機能的な要因よりも、日本人が幼時から畳に親しみこれが心理的に刷り込まれて、その身体的記憶から畳を好むのだと解釈すべきであろう。従って、洋間主体の住居に育った層では、畳に対する感じ方も変わってこよう。和室は世代交代を契機にして変化していくものと思われる。

ただし、この和室における生活が、近年は伝統的作法を失いつつあり、床の間や棚にもやたらに人形や置物を飾り立てることが一般化している。また施工者も和風のしきたりに無知な場合が多く、とくに和室と洋室の唐突なぶつかり合いにはほとんど考慮が払われてない。

洋風居間ではその生活スタイルにイス坐とユカ坐の融合が見られるが、和室においてはその可能性は乏しい。戦後の一時期、畳が単なる床仕上げとして扱われたことがあったが、もともと社会的産物として生まれたものであるから、やはり日本的なものとして残るであろう。また残す以上は、伝統を踏まえた上での新しい和室のあり方を追求すべきであろう。

3-3. 個室化と居間の性格

〔空間の機能分化・公私分化の理念の発生〕

第二次大戦前までの日本住宅は、座敷を中心としたオモテの空間と茶の間を核としたウチの空間という大きな性格づけはあるものの、部屋と特定個人との固い対応は存在しなかった。

大戦後の大きな変化は、用途に応じて空間の機能を分化することと、家族構成員に対して私室が与えられるようになったことである。ここに住空間の「公私分化」の概念が生まれた。この背景には家族構成員個人の個性の尊重とプライバシー重視の理念が存在したのである。

〔私室確保の意味するもの〕

戦前の続き間的な住居では、かなり規模の大きな家でも今日的な意味での私室を持つものは稀であった。体験記述事例でも、一応子供に部屋が与えられている場合も、就寝とは離れた共同の勉強部屋であったり、あるいは二階座敷の次の間や納戸などを使用し、子供が順次そこを通過していくという性格のものであった。より小規模の住宅の例では、家族全員が家中の空間を共用している。それにもかかわらずプライバシーについて思い悩むというわけではなく、それに慣れていたのでといえる。

現代では住宅は2階建が一般化し、その2階が個室となる。しかし多くの場合、この子供室は個人の自立的な領域という意味よりも単に機能としての勉強部屋確保の意味が大きく、とくに受験期の子に優先的に与えられるという使い方も見られるのである。

もちろん、個室の確保は成長期の子供にとって個性の確立に大きな役割を果たすという一般論はあるが、逆に家族との接触の機会が乏しくなることが問題とされ、とくに2階個室が階下の居間・食事室などと隔離された存在になることは、しばしば問題視されている。

〔居間の形成とその意味〕

私室の形成は一方で家族共用空間としての居間の形成と対応する。これが公私分化の基本理念である。

戦前の住居では、家族の集まり部屋として茶の間があった。戦後はDKが発生し、さらに洋風居間が一般化した。ただし、多くの住み方調査や体験記述事例から見ると、この居間は空間としてのしつらえのみが先行し、家族共有の集まり部屋としての生活の形成が伴っていない例が多い。

欧米の居間と日本のそれとの基本的なちがいは、欧米では居間が「個」の空間のソトにあるのに対して、日本では居間もウチの空間としてあるということであろう。欧米では個人が勝手に振舞えるのは私室の内のみであり、居間は家族集団の公の場として、さらには外部社会に開いた場として意識される。その観念を日本に持ち込んだのが「公私分化」の理念であった。

一方、戦前までの日本住居では住居内に公と私の領域概念は乏しく、オモテとウチの概念が支配していた。対社会の領域として座敷を中心とするオモテがあり、家族の日常生活の場として茶の間を核とするウチがあった。そしてオモテは主人に属しウチは主婦と子供に属していたといっよよかろう。ところが戦後は、このような住居観は接客本位だ、封建的意識の反映だと批判され、また戦後社会の貧困が足かせとなって、オモテすなわち座敷が否定され、住居はウチだけで構成されるようになったのである。

〔オモテの存続・復活〕

オモテが否定され、接客空間が排撃されたとはいえ、実生活の上で来客がなくなったわけではなく、それは居間に通された。居間がオモテとウチの機能を併せもつことを強いられ、そこに矛盾が発生する。

地方都市や農村部ではオモテもなお存続していたが、60-70年代の住居規模拡大と共により明確にその復活傾向が見られ、続き間座敷が形作られつつある。これは西欧的な意味での家庭内の公的空間ではなく、非日常の特別用途のための空間として意識されるものである。

〔「オモテ・ウチ」概念と「公・私」概念〕

「オモテ・ウチ」概念は戦前までの観念であり既に失われたものと捉えられているが、今日の日本住居は結局はその延長線上にあり、オモテが捨てられウチだけが残存したものと見る事ができよう。その根拠として、住居内では居間や座敷までシャツやパジャマ姿で居ることが一般化しているし、さらに夫婦寝室が独立性ある個室でなく居間に続く和室に置かれることが多いのもその方向にあるものといっよよい。

西欧的な公私の概念を軸として住居が構成されながら、実は生活の実態も観念もその方向を向いてはいなかった。子供室（勉強室）のみ隔離されたが真の意味で個人の領域が確立されたわけではなく、とくに夫婦の領域は未発達であった。それは集まり部屋としての居間の確立が不完全であったことと対応する。そもそも「個人の自立」を不用意に空間的な「個室の確保」と短絡させたことが誤りだったとも考えられる。

むしろ日本人の感情に根ざした「オモテ・ウチ」概念にもとづきながらその発展を図ることが、より積極的な解決につながるようになる。徒に閉鎖的な個室を設けるよりも家族の一体となった住居空間のあり方を再考すべきであり、私室相互あるいは私室と居間との関係づけ、家族の成長や条件の変化に応じて使い方を変更しうる柔軟性、互いに気配を感じうるような空間構成などを考える必要がある。同時に、現代的な対社会の構えとしてのオモテのあり方を確立すべきであり、住空間をフォーマルとファミリーを対置して構成するののも一つの解となりうるであろう。

3-4. 対社会性のあり方

現代日本住宅において、大戦後の約半世紀の間に大きく変化したのは、住居での接客や近隣との関係、すなわち「対社会性」のあり方である。そして、この「対社会性」をどのように考えていくかは、今後の住居計画の最も重要な課題の一つといえる。

〔接客空間について〕

戦前の都市住宅では、接客を主としたオモテと家庭生活の場であるウチが分かれ、オモテが南面して住居の主要な場を占めていた。

しかし戦後は、当時の世相を背景に、それまでの接客空間偏重への批判が高まった。同時に戦後の極めて貧しい住宅事情もこれに拍車をかけたと思われる。そのような状況から、小住宅でもまた集合住宅でも、接客のための空間を設けることはなく、家庭生活のみを主体とした「都市LDK型」が一般化するのである。

LDK型では、接客の機能は戦前のような「応接間」ではなく、洋風居間（リビングルーム）が担い、家庭生活の中に迎え入れることが想定された。しかし、実際の家庭生活は外に向かって開くことを慣習づけられていなかったため、来客の際にしばしば混乱を生ずることになった。居間は、旧来のオモテ・ウチの構成でいえばウチに属する空間であり、日常の家族の利用形態には対社会的な視点が失われているのが実態である。

一方、近年は洋風居間に隣接して和室が設けられることが一般的となった。この和室には書院座敷の意匠がほどこされ、客間としての機能を担う場合も多いが、接客専用というわけではなく、対社会性を担う空間としては甚だ心許ない。むしろ転用性が期待され、その機能は居間空間の延長であり、接客空間であり、さらにしばしば夫婦寝室ともなるのである。

もちろん、このような状況はすべて住居形態に原因があるのではなく、むしろ住居内での接客生活そのものの変化がこれに対応している。まず、日常の気軽な接客には、伝統的住宅でも座敷は使われず、勝手口、内玄関、あるいは茶の間が使われていたが、現代ではそれに洋風居間やDKが充てられる。一方、いわゆる改まった接客は、現在の都市生活者の家で極めて少なくなっている。年中行事や通過儀礼などのハレの生活は今日では著しく衰退している。従って、住居はそれへの対応を欠いて作られるが、まれにはあれ、その必要が起こると混乱を呈するのである。かわりに、他人を家に招いて行なうホームパーティが興りつつあるとの観測もあるが、現段階ではまだほんの一部の現象にとどまっている。

結局、対社会的機能を担う空間は、今日でも相変わらず「座敷」なのである。ただし、ウチの領域のみによって構成される今日の「現代型住宅」では、そこに設けられ

た座敷は社会性を住居内に「留保」するための空間であり、そのために、接客空間として広く定着している座敷の意匠が継承されているにすぎない。

一方、地方の住宅を中心として続き間座敷の隆盛がみられる。この空間の用途は、非日常の対社会的利用（現在は主に葬式）であり、現時点では、他にこの社会性を担う空間はない。しかし、過度に派手になるその意匠は、むしろ「見栄」的な意味合いが強くなってきていることを示している。これは「入母屋御殿」の外観に共通するものである。そして、供給側の姿勢もこれを助長しているのである。

〔内と外の関係、戸外に対する閉鎖性〕

現代住居が戸外に対して閉鎖的になってきていることは、広く日本の住宅に共通する傾向であるが、とくに顕著なのは集合住宅である。集合住宅では、一般に住戸は厚い壁とスチールの扉によって固く閉ざされている。近隣との日常的な接触は住居の重要な機能の一つであり、これに対する閉鎖化の弊害は少なからぬものがある。この問題は、すでにこれまでの研究で取り上げてきたし、住居が戸外に対して開放的な構えをもつ集合住宅の試みなどもみられるようになった。しかしながら、現状としては、戸外に対する閉鎖性は、集合住宅の強い特徴でありつつある。

住居が外とのつながりを失いつつあることは、戸建住宅においても同様である。「都市LDK型」では、玄関は概ね北側か東西側に付き、その横は便所や浴室あるいは壁で閉鎖的に構成される。また、「地方続き間型」では、出入り口は慣習に従って南面するが、突き出した玄関が付けられる。この玄関は、もっぱら続き間座敷との関係を意識して設けられたものであり、日常の出入りが配慮されたわけではない。総じて今日の住居の空間構成には近隣との関係への配慮が欠如している。

住居の閉鎖化の問題は、室内側の変化も関係している。まず、伝統的住居をみれば、町家の場合は、開放されるのは「ミセ」という外への開放を前提とした空間であり、家族の居住空間はその奥に位置して直接外部にさらされていたわけではない。農家では土間が緩衝帯となり、さらにこれに続く部屋は近隣との接触を前提とした空間だった。それに対し、現代型住居が外部への開放性をもつとしたら、開放されるべき空間はリビングであろう。しかし、社会性をもたない現在のリビングが、そのまま開放に耐えるかどうか甚だ疑問である。住居が開放的に構成されるためには、基本的には生活そのものが対社会性をもつことが前提とされるだろうし、さらに空間の側からも生活に支障をきたさずに開放性を確保しうる住宅のあり方が検討されてしかるべきである。

4. 現代住居の「型」の流れに関する考察

住居の変容は、これを巡る力関係の変化に起因する。それは時代により時期により異なった様相を呈する。

〔戦前・戦中期〕（—1945年）

和室続き間を主体とする間取りが支配的であった。社会的規範の力が大きく覆い、生産方式の上でも木造在来構法による規制は大きく、さらに和室住宅に生まれ育ったことによる心理的刷り込みは圧倒的に強かった。これらの力が従来型の型を持続させていた。

人為的な変革の力としては住宅営団による計画があったが、住様式に現実的影響を持ったとは思われない。むしろ大戦期間中における住宅建設の停滞、空襲による大量滅失などの社会的影響は、旧来の住様式・住居観から脱皮する契機を与えたと思われる。

〔戦後初期〕（1945—55年）

大戦後は、日本の住居の最も貧困な時期であった。しかしDKの導入、洋間の導入、イス坐への移行などの新しい動きが活発に始まった時期でもある。大きな変化は、住居を覆っていた社会的規範の枠が外れ、旧来の道德・規律・作法などにゆらぎが生じたことである。一方、外からの影響として占領軍を通じての文化的支配は大きく、広く一般大衆の住居・住生活の洋風化を促した。

もう一つの力は、公共住宅の計画を通じての変革の動きである。合理性にもとづくDKの導入、間仕切り壁の導入、さらに食事のイス坐化、台所設備の改善などは、住居の変容に対し大きな刺激を与えた。建築家による小住宅の設計も、住様式に与えた影響は小さくない。

〔高度成長期〕（1955—73年）

1950年代後半から70年代初めに及ぶ高度成長期の住居変容は著しい。洋風居間の確立、個室化の進行、イス坐の優位、そして他方、地方における続き間座敷の隆盛という両面の状況を呈し、変化と混乱の様相を呈した。

まず、家族形態の変化すなわち核家族化の進行は、家庭における慣習やしつけの崩壊を促した。急激な人口の都市集中によって零細アパートが大量発生し、これは旧来の住様式の崩壊に拍車をかけた。都市化現象は地価の上昇を生み、住居の高密化、住宅団地の建設、高層化、戸建住宅の2階建化などの諸現象をひき起こし、これらは戸外環境の変化のみならず住戸の間取りに大きな支配力をもった。経済成長は住居規模の増大を生み、洋風居間の形成など、住様式の変容を促進したのである。

生産・供給形態の与えた影響も小さくない。産業化され、部品化が進み、この結果、画一化が進行した。住宅団地の大量供給は、さらに画一化を強める結果となった。大手住宅産業も供給に参入し、需要者との直接の接触は薄れてマスとしての住宅産業へと変質していく。

総じてこの高度成長期の主役は社会的影響力の強さで

あり、文化の力は後退を余儀なくされた。

ただ一方で、地方では旧来の慣習・意識に支えられて続き間座敷が根強く存続し、農村の富裕化に支えられたその建設の隆盛は注目すべきである。

〔安定期—現在〕（1973—90年）

1973年のオイルショック以来、日本経済の成長にも歯止めがかかり、住宅についても過去をふり返り現状を考えるゆとりが生じた。再び社会的規範・良識が力を得つつあると同時に、資本の力、上からの力に支配されるのではなく、住み手自らの意志によって主体的に住環境を作ろうとする動きも盛んである。

しかし一方では情報の力がこれまでにない強力な作用を及ぼしつつある。イメージを先行させて住居を作るという手法が幅をきかせ、これが住居の変容にあなどり難い役割を演じている。情報の操作によりあらゆる地域の人々が大都会の現代的イメージを同時に共有するという状況が生じ、全国的に画一化・均質化が進んでいる。

一方、このような流行には背を向けるように続き間座敷もまた各地で隆盛を極めているが、その豪華版「入母屋御殿」も標準設計図とマニュアルが全国的に出回っており、かくれた情報化の産物といえる。

計画の力も、公共住宅に優れた事例を数多く出現させている。また住み手が自ら集合住宅を作るコーポラティブ住宅などの運動も着実に力を得つつあり、1戸の間取りのみならず集住のあり方における興味ある事例が数多く見られている。

今後の計画は、文化の力の尊重と住み手の主体的な力の展開にかかると共に、情報の力をいかに効果的に利用するかによるところ大きい。その意味でも、一般人、とくに青少年に対する正しい住教育はきわめて重要である。

〈研究組織〉：ハウジング・スタディ・グループ

主査	小柳津醇一	芝浦工業大学	助教授
委員	鈴木 成文	神戸芸術工科大学	教授
	畑 聰一	芝浦工業大学	助教授
	初見 学	東京理科大学	助教授
	在塚 礼子	埼玉大学	助教授
	友田 博通	昭和女子大学	助教授
	長沢 悟	日本大学	助教授
	曾根 陽子	共栄学園短期大学	助教授
	笠嶋 泰	大同工業大学	助教授
	戸部 栄一	八戸工業大学	助教授
	小林 秀樹	建設省建築研究所	研究員
	菊地 成朋	東京大学	助手
	黒野 弘靖	新潟大学	助手
	高岡えり子	東京理科大学	助手